

## 東京セミナーを終えて

熊澤 輝一（地球研）

今回のセミナーの趣旨をチラシに掲載する際、簡潔な一言を求めて、「まちの景観から気候変動の枠組条約に至るまで、これらはすべて〈みんな〉が環境を〈正しく〉選べるか、という問題に帰着します」と言い放ってしまいました。さて、〈みんな〉とはだれで、なにをもって〈正しく〉選べたと判断してよいのでしょうか。

### 〈みんな〉の拡がり と 〈正しく〉選ぶこと

はじめにふれておきたいのは、〈環境〉ということばの幅についてです。講演やポスター発表で取り上げられた環境問題は、道路計画、再生可能エネルギー利用、原発事故、資源採掘にともなう人為的攪拌、外来種のヒアリ、サンテーションといった特定の対象を扱ったものもあった反面、多くは地域にある環境一般、あるいは環境概念を扱うものでした。具体的な影響が想定される問題と、写真、アート、難民受入などの行為をとおして得られた、やや一般的な論点とを、同時に扱うなかで見えたことがあるとすれば、それを深める意味はあるように思います。

いっぽう、議論に取り上げられた民主主義の主体も、災害ボランティア組織のような事象に直接かかわる主体から、過去と未来の生活者、カミさまにいたるまで、かなりの拡がりがありました。午後のワークショップでは、議会制度や民衆の政治参加といった民主主義の制度と〈みんな〉との関係に関心を寄せていたグループが多かったように思います。制度がカバーする主体や、制度に従って用意された機会にアクセスできている主体が、だれであって、だれでないのかが、主要な論点になったと考えます。このことは、もう一つの切り口である〈正しく〉選ぶことを考えるうえでも重要な点のように思います。

〈正しく〉の観点からふりかえると、ポスターでは、市民参加を促進するコミュニケーションのほか、参加手法の評価、正統な手続きを踏むがゆえに起こる災害ユートピアの終焉を示したものなど、制度の設計段階から実社会での事象にいたるまでのさまざまな角度から取り上げられていました。

その後のワークショップでも、「制度と規範が一致しなくなったときに、どうしたらよいのか」という点に関心を寄せたグループがありました。〈みんな〉という観点とはちがって直接的に表現することはむずかしいですが、すべての発表やグループの議論の背景には、〈正しく〉選ぶという論点が、そう深くないところに控えているようです。

## セミナーという場の意味

実際の現場とは別の、しかもある種閉ざされた空間で、当事者ではない大学院生と若手研究員が、発表というかたちで議論することには、社会的にどのような意味があるのでしょうか。それは、いろいろなケースを突き合わせて相対化することで、民主主義の制度と〈みんな〉、〈環境〉との関係が、やや一般性を帯びたかたちで見えてくるということです。今回見出された概念たちに説得力をもたせるには、ケースごとの議論を積み重ねてゆくしかないのですが、追求すべきは、議論の結果を世に問いながら、次の議論へと結びつけるプロセスを継続して提供する姿なのではないでしょうか。

ポスター群に潜む課題の本質をつきとめようとしながら、環境と社会の未来可能性について深く考える機会となった今回の企画。参加した大学院生や若手研究者たちを中心に、みなで知恵をしまり出して、短い時間でまとめました。得られた概念は、一見したところ民主主義の課題とは関係ないものもあったかもしれません。しかし、地球環境の未来を考える対話は、こういったことばたちから始まるのではないのでしょうか。そんな対話のきっかけたちを増やしていくこと、このようなセミナーが持つ意味はこのあたりにあるのかもしれません。